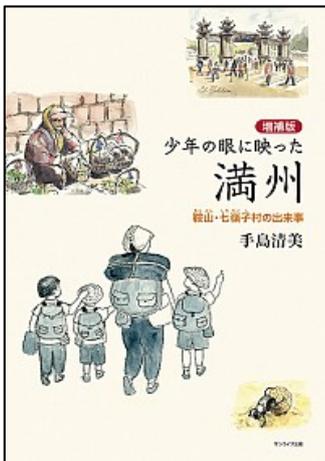


書評：手島清美 著「少年の眼に映った満州^{あんざん} 鞍山^{しちれいし}・七嶺子村の出来事」
(増補版)

吉田英生 (S53/1978卒)



著者の手島清美氏 (S37/1962卒) は三井造船を経て1997年7月から2001年3月まで機械工学専攻の常勤講師として3回生の設計演習 (軸流タービン) などを担当されましたので、この4年間に教えを受けた卒業生には懐かしく思い出されることでしょう。本書 (サンライズ出版2019年12月発行) は、S18/1943年からS21/1946年—手島氏が6歳から9歳くらいの間に、満州鞍山に一家で移住したときの思い出を著したものです。内容は、同社の案内のとおりです：

満州の“鉄の都”鞍山に移り住んだ僕たち家族5人。家は3階建てアパート、愛犬はベローとアミー。楽しいことの連続だった暮らしが、昭和19年7月、B29の空襲により一変した。引揚げまでの満州生活を回想した初版に、同書を読んだ同級生との書簡のやり取り、2019年5月に再訪した鞍山・七嶺子村紀行の2章分を新たに収録。

<http://www.sunrise-pub.co.jp/isbn978-4-88325-672-3/>

タイトルに「少年の眼に映った」とあるように、満州に関する本の多くが悲惨なトーンで書かれているものの、「子供の眼に、鞍山での生活はすべてが初体験で好奇心の対象でした。楽しいこともいっぱいありました。」というのが本書の大きな魅力の一つです。また、小生は寡聞にして知りませんでした。七嶺子村事変 (千山事件／動乱)¹に関する数少ない貴重な記録にもなっています。

70年以上前の記憶を出発点とし、その後の徹底した調査に基づき、氏のいかにも技術者らしい几帳面な記録にも感銘を受けます。加えて、義妹の方による挿絵やカバー絵が「重苦しい内容にもかかわらず、やさしいタッチで心を和ませてくれています。(手島氏)」

本書の初版 (2015年) の読者経由のご縁で、当時同じ小学校同じクラスにおられた方と実現した書簡交換で増補版第18章が始まるのも、感動的です。最後に、日本ガスタービン学会の委員会がかつて手島氏の部下だった方から伺った言葉を思い出しました—「手島さんはやさしい方で、どんなことがあっても叱られたことがない」—まさに、そのやさしさを実感する一冊でもありました。

¹ 松本俊郎、中国東北の戦後情勢—国共内戦の帰結と鞍山の政治情勢、岡山大学経済学会雑誌 31(1),1999, 19-6
http://eprints.lib.okayama-u.ac.jp/files/public/4/41485/20160528040453193509/oyer_031_1_019_061.pdf